

モリソンの書簡についての研究

—Joshua Marshman との確執

朱 鳳

0. はじめに

ロバート・モリソン (Robert Morrison, 1782-1834) の中国語翻訳、中国語学習に関する研究において、資料として彼の著作、未亡人の回想録がよくあげられている。しかし、ロンドン大学 SOAS 校に所蔵されている膨大なモリソン日誌と書簡は蘇精氏以外今までほとんど研究資料として利用していない。

筆者はこの3年間これらの原典資料に注目し、資料の翻字整理と内容確認作業に従事している。モリソンの日誌には日常生活にある些細なことを細かく記録してあるのに対して、書簡では中国での宣教、印刷活動、中国語学習状況、近隣諸国に在住している宣教師との交流などさまざまな重要事項を報告書としてロンドン伝道会へ送っていた。本論はモリソンの 1809 年～1812 年までの書簡を研究資料にし、モリソンとマーシュマン (Joshua Marshman, 1768-1837) との間の中国語学習、中国語翻訳に対する意見の相違、確執について論じたい。

マーシュマンは 1799 年にインドに派遣された宣教師である。彼はベンガル語とサンスクリット語を学習する傍ら、インドに隣接している中国にも興味を持ち始め、キリスト教の宣教における中国の重要さを認識し、いつか中国語を学習しようと考えていた。1805 年にマーシュマンは聖書翻訳を視野に置き、ラサール (Mr. Lassar) というマカオ生まれのアルメニア人に中国語を習い始めた。

1807 年にモリソンの中国への赴任にあたり、ロンドン伝道会はモリソンにインドのセランポール (Serampore) に在住する宣教師と連携して、中国語聖書翻訳に取り込むようにと指示した。モリソンはロンドン伝道会の指示に忠実に従い、中国に上陸した直後にマーシュマンに数回手紙を出したが、2 年後によくやく返事が来た。しかし、返事の手紙には中国語学習や翻訳のことは一切触れていなかった。「彼らはどうも私との連絡を避けようとしているようだ。リーダーの兄弟たちは年齢的にも、聖書翻訳のための中国語学習においても私の先輩である。しかし彼ら

は私には翻訳のことを一言も言わなかった。私は彼らのやり方に賛成できない¹とモリソンがロンドン伝道会への書簡にマーシュマンへの不満を吐露した。

このような不満はやがて批判になり、モリソンの書簡に散見している。モリソンの批判はマーシュマンの中国語観と中国語翻訳法に集中している。ではその批判はどのようなものであろうか。次に書簡の資料と共に、モリソンとマーシュマンの著作も比較しながら検証していく。

1. 中国語観

インドにいるマーシュマンの中国語学習は困難に満ちたものであった。中国語で書かれている英語、ラテン語の字書はもちろんまだ存在していない。その上、教師のラサールはほとんど英語がしゃべれなかった。マーシュマンはラサールと彼が連れてきた二人の中国人に従い、中国語学習を始めた。その困難な様子について、「中国語の文章をいかなる別の言語に訳すこともなく、私は、補助手段もなく、中国語で中国語の学習をスタートした」と彼は後に語っていた²。

このような学習環境の中で、4年後の1809年にマーシュマンが *The works of Confucius* (『論語』) の翻訳を出版した。彼は、インド総督 Lord Minto への「献上の辞」に「古代の優れた中国哲学者の原典が初めてイギリスの読者に紹介された。この出版は中国文学の考え方を伝えることができるのみならず、中国語の重要性とこれへの関心が日に日に増している状況の中で、この最も奇妙で学習困難な言語を習得する手助けにもなると期待されている」³と誇らしげに語っていた。

新聞報道でこの出版を知った中国にいるモリソンは書簡の中でマーシュマンの書物にあるキーワードの「論語」の発音が間違っていると指摘した。200年前のカトリック宣教師や、ヨーロッパ在住の漢学者たちは「論語」の発音「Lun-yu」であるという共通な認識を持っている

¹ Letter to LMS Apr. 4th 1809 'they have however thought proper to decline answering me. The Brethren who take the leading part there are my seniors, in years, as well as in application to the Chinese language for the purpose of translation the S.S. into it. They have never said one word to me about it & I do not approve of their proceedings.'

² Joshua Marshman *Elements of Chinese Grammar* 『中国言法』 Serampore 1814 'The labour therefore of beginning to study Chinese *in Chinese*, without being assisted by a single sentence from a Chinese author translated into any language'

³ Joshua Marshman *The works of Confucius* (『論語』) Serampore 1809 'The Original Text of this ancient and amiable Chinese Philosopher, is now for the first time introduced to the English reader, in a form which it is hoped will not only convey an idea of Chinese literature, but facilitate the acquisition of that most curious and difficult language, to which circumstance are daily giving importance and interest.' p.i

のに、マーシュマンは「Lun-ngee」と発音している。この出来事から、モリソンはマーシュマンの学習環境と翻訳についてさらに言及した。

北京に14年も在住し、中国文学に造詣深いロデリゴ（Roderigo）によると、ラサールは中国語の教師としては非常に不適切である。…（中略）…またマーシュマンらに中国語を教えている助手は地方の言葉、しかも田舎の方言しかできないのではないか。そのため、広東の町あるいは中国全土で使われている「Yu」ではなく、「Ngee」と発音してしまった⁴。

つまり、（マーシュマンの）中国語に関する知識はまだ生半可と言わざるを得ない。にもかかわらず、彼らは熱心に「中国語を習得への手助け」「他の言語より大して難しくない」などと語っている。中国に滞在しているヨーロッパ人は昔から、もちろん今もしゃべる、聞く、書くにおいて、中国語は非常に習得しにくい言語だと認識しているが、カルカッタやセランポールではそのような認識がない。

もし多くの人が難しいと認識している中で、一人の人が簡単だと叫ぶならば、彼は特別の才能があるか、中国語の習得度に認識が甘いかのどちらかになるだろう⁵。

つまり、モリソンは、マーシュマンが中国語学習がまだ不十分な中で『論語』を翻訳、出版することに対して非常に否定的であった。「中国語をより習熟する時までには急いで翻訳に取り組むべきではない」と苦言も呈した。

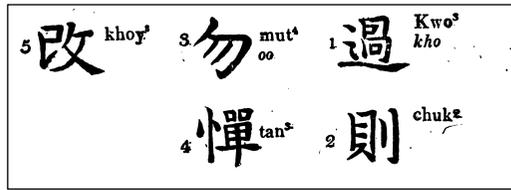
では、マーシュマンの *The works of Confucius* はどのような著作であろうか。これから中国語を学習しようとする人の「手助け」になるものであろうか。

この書物は孔子の生涯と論語の翻訳の一部で構成されている。論語の引用は中国語である以外はすべて英語で書かれている。また引用した中国語の発音の表記は完全なものではない。

⁴ Letter to LMS Apr.4th 1809 'I perceive that their assistants teach them what is not only the provincial dialect but the vulgar pronunciation of a country town. Hence the word in the city of Canton & throughout the Empire in the Mandarin tongue is "yu" they spell "ngee".'

⁵ Ibid. 'This proves that there is but a partial acquaintance with the Language. Yet they are very fond of talking of the "facility of acquiring the Chinese" -& say that "it is not more difficult than other languages" - It has been considered, & is yet considered by Europeans living in China to be a very rare & difficult thing to acquire the Chinese language -to be able to speak & read & write it -but it is now found out at Calcutta or Serampore that it is no such thing. If the generality of people find any pursuit difficult some man cries out that he finds it a very easy thing. It proves, either that he has very superiour abilities, or which will not be so well, that he has but a partial view of the subject & his standard of perfection is low.'

例えば:



漢字の右上に数字とローマ字の発音記号が表示されている。これらの表示について、マーシュマンは次のように説明している。

It is scarcely needful to inform the reader that the characters must be read in the Chinese manner, i.e. perpendicularly, from the right to the left; but it may be necessary to say, that the small figures placed over each Chinese word, denote the four distinctions of sound attached by the Chinese to these monosyllables. Those marked (1) have the moderate, even sound; those marked (2) the acute, rising sound; those marked (3), the long sound; the those marked (4), the short and rapid sound. To a few of the characters in the beginning of this volume, additional names are added in Italics, for the sake of conveying some idea of the Mandarin pronunciation. ⁶

つまり、右上の数字は中国語の四声を表している。また一部のイタリックの表示は官話の発音だと説明している。しかし上段のローマ字に関して何の説明もない。おそらくモリソンが指摘したように、マーシュマンの中国人教師は地方の方言しかできないため、官話の発音を完全に表記できなかったのかもしれない。上段のローマ字はどこかの方言に違いない。従って、この書物はマーシュマンの言うように「中国語学習の手助けになる」というより中国の文学、歴史に関する知識を少しヨーロッパ人に伝えたぐらいといった方が妥当だと考えられる。特筆したのは本書のように中国語の四声を1から4の数字で表示するのは非常に斬新なアイデアで、おそらくマーシュマン以前の書物では、このような方法で中国語の四声を紹介したことはなかったのではないだろうか⁷。ただ、中国語の学習教科書として、モリソンのものに及ばないことは明らかである。

では、モリソンが考えていた中国語の習熟はどのようなものであろうか。彼は自分が一年間を通して Ko-sien-seng (葛先生) について、『大学』『中庸』『論語』を丁寧に学習していること

⁶ Joshua Marshman *The works of Confucius* (『論語』) Serampore 1809 p.xxxvi

⁷ この点については、2013年3月韓国高麗大学の国際シンポジウム「越境する近代語：中国・日本・韓国」で発表する際に朱京偉先生の指摘を受けて、気づいたことである。

をロンドン伝道会に報告した時に、「私が中国語で書物を編集することができるようになるには、より多くの中国語を学習しなければならない。異教徒（中国人を指す-筆者注）の言語と内面的な思考の完璧な理解は、このような学習を通してしか得られない」⁸と述べている。

モリソンは中国語学習の先生に関してはマーシュマンと比べると随分恵まれていた。彼は街の商店主や子供たちから広東語などの方言を学ぶと同時に葛先生のような知識人から官話と中国語の古典も学習することもできた。一方マーシュマンは全く違う環境の中にいた。インドにやってきた数少ない中国語の分かる人を頼りに中国語を学習するしかすべがない。学習環境の違いから、当然二人の中国語への認識にギャップができた。中国語の奥深さを知ったモリソンは慎重に丁寧に中国語を学習し、中国人の世界観まで知ろうとした。その彼は当然マーシュマンの中国語観に辛辣な批判を加えた。

セランポールの活動報告書によると、彼らは（中国語で）「随想を語ったり」「スピーチをしたり」する大げさなショーを行ったそうだが、私には滑稽に見える。このような中国学習ショーは Lord Minto 政権を興奮させたが、広東ではまったく違う見方になる。

Lord Minto によると、「彼らは文章体の中国語学習に大変正確でかつ広い習得ができた」。もしこれを信じるなら、きっとだまされていると私は言う。なぜならば、私は大変な才能もっていて、数年間のすべての時間を中国語学習に費やしたが、結局完璧な中国語を習得できなかった人を何人も知っているからだ。彼ら（セランポール在住の宣教師を指す-筆者注）に才能と努力を認めるが、しかし奇跡のようなパワーを持っているとは思わない。残念ながら、彼らのショーはほとんど無意味だと言わざるを得ない。このようなやり方は完全に間違っている。彼らが「完璧だ」といっているものは中国文学のいろはにすぎない⁹。

⁸ Letter to LMS Dec.14th 1809 'You perceive that if I would be able to compose in Chinese I must read much Chinese. The language & the sentiments of the heathen are only to be acquired fully in this way.'

⁹ Letter to LMS Dec.10th 1809 'Now as in the Report of the Examination at Serampore it is said that they "pronounced essays" & "delivered speeches" & thereby made a pompous show, it appears to me ridiculous. For I am very sure that the show of learning-Chinese learning -which excited Lord Minto's admiration there, would in Canton have excited something very different.

" They have achieved a very correct & extensive acquaintance with the written language of China." according to Lord Minto. If you believe it, I am sure you will be deceived: Because I know persons of more than a mediocrity of talent who have for many years explored nearly the whole of their time in learn[in]g Chinese & who after all have but a very incorrect & partial knowledge of it. I allow the lads talent & labour, but I have not heard of their having miraculous powers. I am grieved that they should with so little means make so much show. This I think is very wrong. When after all, that in which they are said to be "perfect", is not

中国語が難しいかどうかは重要な問題ではない。マーシュマンはこの問題に執着しすぎて、中国文学を化け物扱いして嘲笑した。その結果、4年間中国語を学習した彼は中国文学には生かじりの知識しかもっていない¹⁰。

以上の内容はあくまでもモリソンの個人的な意見である。今日の視点から考えると、モリソンはマーシュマンに先を超されるのではないかという焦りから、あるいは中国に在住しているという優越感から、マーシュマンの功績を過小評価している部分があるのではないかと思われる。

2. 聖書翻訳

マーシュマンは『論語』を英語に翻訳すると同時に聖書の中国語翻訳にも着手していた。その翻訳が正式に出版されたのは1822年だが、1811年にはすでに着々と準備していたようだ。このニュースを聞き、同様に聖書の翻訳に取り組んでいるモリソンの心境は穏やかではなかった。

セランポールでは新約聖書の翻訳を行っているようなので、私はこの仕事から手を引こうと考えている。私はマーシュマンに翻訳のコピーを送るように頼んだにも関わらず、彼からは何も送って来ない。彼らは宣教師には紳士的で、親切だが、どうも派閥を作っているようだ。我々が人気取りのため(for popular favour)にお互いに戦わなければならないのはとても残念なことだ¹¹。

どうもセランポールと中国の宣教師の間、中国語学習だけではなく、聖書翻訳の先陣争いがあったようだ。お互いが強力なライバルだと思っていたようだ。ようやくセランポールの宣教師が翻訳した聖書を手にしたモリソンはこのように評価した。

more than the A.B.C of Chinese literature.’

¹⁰ Letter to LMS Dec.18th 1812 ‘The question, whether it be easy or difficult, is not of great important. Mr. M dwells too much on it, and laughs at the literary ‘bugbear;’ when the fact was, that, after four years’ study, he had a mere smattering of it.’

¹¹ Letter to LMS Dec.19th 1812 ‘I must have expressed myself ambiguously to make you suppose that I intended to quit the New Testament on account of what was going at Serampore. I correspond with Marshman; but am displeased by his not sending any of their translations to me though I particularly requested them. They are civil & kind to our Missionaries, but act I think on party principles, I should be sorry that we should have to struggle for popular favour one against another.’

ベンガルで翻訳された福音書の中の、私は創世記と賛美詩を入手した。創世記の翻訳において、彼らは異教徒の自然への敬意に関する間違っただけの理解を特に修正すべきだと思う¹²。

マーシュマンの聖書が 1822 年に出版された事実から判断すると、おそらく、モリソンが入手したものはまだ草稿段階のものであろう。この評価から見ると、モリソンはマーシュマンが翻訳に用いていた中国語が不適切だと感じて、彼らは中国人の世界観を理解していないからだと批判している。当時マーシュマンはどのような中国語を使ったか定かではないが、彼の中国語のレベルはモリソンよりかなり劣っていることが推測できる。

しかし、モリソンはマーシュマンに先を越されたとは言え、決して聖書翻訳を諦めていた訳ではないのである。むしろ、マーシュマンの不適切な翻訳を見て、より一層中国語聖書を翻訳しようと決心した。

塩山の論文「域外における聖書の中国語訳—馬士曼『聖經』の語彙的特徴について」ではマーシュマンの『聖經』とモリソンの『神天聖書』の文法語彙を比較し、ほぼ同じものであると結論を出した上、「中国本土で翻訳を行ったモリソンから何らかの援助があったと考えるのが、妥当であろう」¹³と推測していた。つまりマーシュマンの『聖經』はモリソンの『神天聖書』によるものが多い。モリソンの『神天聖書』はマーシュマンより 1 年遅れて 1823 年ようやく出版したにもかかわらず、なぜそのように言えるのか。実はモリソンは『神天聖書』を出版する前に、すでに聖書の一部をいくつか印刷出版していた。

- 1) 1810 年 『耶蘇救世使徒傳真本』
- 2) 1811 年 『神道論贖救世総説真本』
- 3) 1812 年 『聖路加氏傳福音書』
- 4) 1813 年 『耶蘇基利士督我主救者新遺詔書』(『新遺詔書』)

特に 1813 年に出版された『新遺詔書』は後に 1823 年に出版された『神天聖書』の一部となっている。『新遺詔書』とマーシュマンの『聖經』、また両者とも参考にしたといわれた『四史攸篇』から用例を出して、翻訳語彙を比較してみよう。

『四史攸篇』「第三章」耶穌既生于如達 白冷 黑洛特王時既有數瑪日自東方來 柔撒冷 曰如

¹² Letter to LMS Jan.5th 1811 'In consequence of the translation of the Gospels at Bengal, I have attended to the book of Genesis & the book of Psalms. The book of Genesis I consider peculiarly desirable to correct their absurd ideas of the heathen respecting the origin of the things.'

¹³ 塩山正純「域外における聖書の中国語訳—馬士曼『聖經』の語彙的特徴について」『文明 21』22 号、愛知大学国際コミュニケーション学会、2009 年

達王新生者何在我等自東見其星我等特來拜崇黑洛特聞驚慌舉柔撒冷皆然王集會鐸德諸宗與民中書士咨究以基利士督必生何處皆曰于如達之白冷（『四史攸篇』にある下線、□は筆者がつけ加えたものである-筆者注）

『新遺詔書』「第二章」夫耶穌生於如氏亞之畢利恆後於王希羅得之時，却有或嗎啞自東來至耶路撒冷，曰彼生如大輩之王者何在，蓋我們在東方見過厥星而且來拜之。王希羅得聞此則惶，而通耶路撒冷僭之一然也。其既集諸祭者首與民之書士輩會，問伊等及彌賽亞該在何處而生。伊等謂之曰，於如氏亞之畢利恆。

『聖經』夫耶穌生於如氏亞之畢利恆後於王希羅得之時，却有哲人從東方來至耶路撒冷，曰彼生如大輩之王者何在，蓋我曹在東方已覩厥星特來拜之。希羅得王聞之則惶，而通耶路撒冷僭之一然。其既集諸祭者首與民之書士輩會，詢及伊等以基利士督應生於何處。伊等對之曰，在如氏亞之畢利恆。

このように『聖經』と『新遺詔書』に使われている人名と地名の当て字はほぼ一致しているのに対して、『四史攸篇』は全く別の当て字が使われていることが分かる。つまり、『聖經』と『新遺詔書』にある人名、地名の翻訳語は『四史攸篇』によるものではないということは明白である。

では『聖經』と『新遺詔書』の人名、地名はなぜ一致したか。これについてモリソンの書簡から答えを見つけることができた。

実は、聖書翻訳に使用する用語に関して、モリソンは早くから用語の統一を考えていた。1811年の書簡で2度ほど言及したことがある。

1811年3月9日

中国語には同音異字がたくさん存在している。聖書或いは宗教専門書によく使われている聖書固有名詞に関して、統一した漢字名を使用する必要がある。でなければ、大きな混乱を招くかも知れない。例え同じ名前を与えたつもりでも、読者が違うように思うケースもある。「Iaiah と Esaias」（イザヤ）は同一人物を表しているが、翻訳した中国語の発音は同じであっても、当て字は違ってくる。このようなことを防ぐために、私が今「聖書固有名詞字書」（Dictionary of Scripture Names）を作成している¹⁴。

¹⁴ Letter to LMS Mar.9th 1811 'You are perhaps aware that in the Chinese language the same pronunciation

1811年11月

中国語に翻訳される聖書或いは宗教関連出版物にあるすべての人名と固有名詞に使用された漢字の統一性を守るために、私は「聖書固有名詞字書」を編集した。もちろんこれは写本においても同じである¹⁵。

現段階で分かっているモリソンの出版物に「聖書固有名詞字書」というものが含まれていないので、おそらくこれは出版のために編集したものではなく、聖書翻訳のために作った固有名詞対照表のようなものであろう。またすべての中国語翻訳書に、写本も含めて固有名詞を統一しようという決意から、セランポール在住のマーシュマンにも知らせたに違いない。実際上記の例のように両者の聖書に使われている固有名詞もほぼ同じことから、これを傍証することが出来たと言えよう。また、もう一つの傍証は彼のマーシュマンへの中国語学習援助である。モリソンはマーシュマンと中国語学習あるいは聖書翻訳に関して意見が対立しているが、マーシュマンへの援助に惜しみはなかった。

マーシュマンから二度に渡って私に紙、本と教師を送るようにと依頼してきた。私も二回ほど彼に紙と本を送った。そして最近教師も送った¹⁶。

つまり、マーシュマンは度々モリソンに紙、中国語書物と中国語教師を送るようにより要求して来たが、モリソンもできる限りの物資と人員支援を送っていたのである。

以上の二つの傍証から考えると、マーシュマンの聖書翻訳にモリソンと一致しているところ多いのは納得できるものである。

may be given by a variety of characters or letters, but in scripture names occurring frequently throughout The Bible, or in religious treatises, it is necessary to use uniformly the same characters, otherwise great confusion would be introduced. And though the same name were intended to be given, it might by the reader be thought a quite different one. The word "Isaiah & Esaias" used to denote the same person is somewhat similar, only in Chinese the pronunciation might be the same & yet the letters different. To prevent any such occurrence, I am filling up a "Dictionary of scripture Names".

¹⁵ Letter to LMS Nov. 1811 'To preserve a uniformity of characters for names of persons & etc. in every part of S.S. as well as in every religions publication which we may make in Chinese, I have compiled from [...] a Dictionary of Scripture names. This of course remains in M.S.'

¹⁶ Letter to LMS Nov. 1811 'Mr. Marshman has twice request me to send him some paper, books & a Tutor. The paper & books requested I have on two occasions sent & recently the Tutor also.'

さらに、モリソンの固有名詞の統一は後輩の宣教師へも影響を及ぼした。試しに 1861 年アメリカ人宣教師ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman, 1801-1861) が出版した漢訳聖書をチェックしてみた。

《新約聖書》〈馬太傳福音書〉第二章

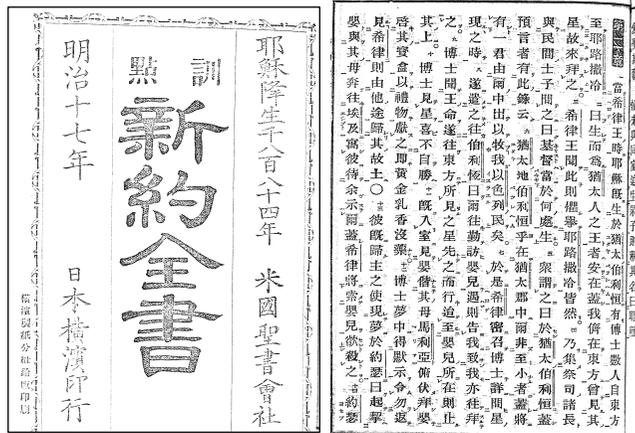
當希律王時，耶穌既生於猶太，伯利恆，有博士數人，自東方至耶路撒冷，曰，生而為猶太人之王者安在，蓋我儕在東方曾見其星，故來拜之。希律王聞此，則懼，舉耶路撒冷皆然。乃集祭司諸長，與民間士子，問之曰，基督當于何處生。眾謂之曰，於猶太伯利恆。

ブリッジマンの翻訳は一見モリソンのものと違うように見えるが、表に整理してみると、何らかの関係があることが明白である。

英語	モリソンの『新遺詔書』	ブリッジマンの『新約聖書』
Herod	希羅得	希律
Judea	如大	猶太
Bethlehem	畢利恆	伯利恆
Jerusalem	耶路撒冷	耶路撒冷

下線部で示したように、モリソンの訳語を参考にした痕跡が残されている。特に「耶路撒冷」という訳語はずっと継承されている。

ブリッジマンの漢訳聖書は日本の聖書翻訳に影響を与えたと言われている。例えば、明治 17 年に横浜で印刷された『訓点旧約聖書・新約聖書』はほぼブリッジマンのもの



横浜市立図書館

と一致している。当然「耶路撒冷」もブリッジマンの聖書を通して日本語に伝わって来た。ここであげているのはモリソンの固有名詞統一の中国と日本聖書翻訳への影響の一例にすぎない。

中国と日本の聖書翻訳における漢訳固有名詞の比較研究と調査は旧約聖書、新約聖書の全体に広げる必要がある。

3. 漢字への理解

モリソンは書簡の中でマーシュマンとの中国語観が違うのだと幾度も述べていた。ここで、両者の漢字への理解と認識の違いについて考えてみたい。中国語翻訳聖書の出版の他に、モリソンとマーシュマンは中国語の文法書もほぼ同じ時期に出版していた。マーシュマンは1814年に *Elements of Chinese Grammar* (『中国言法』、Serampore) を出版し、モリソンは1815年に *A Grammar of the Chinese Language* (『通用漢言之法』、Serampore) を出版した。一見モリソンの方が遅れているように見えるが、実際には、モリソンの著作は1811年にすでに完成し、1811年4月2日に書かれている「序」には「このような(中国文法書)が英語で書かれているのは初めてである (It is the first work of the kind in English)」¹⁷。つまり1811年の時点では、モリソンはこの文法書は初めてのものだとして認識している。モリソンの書簡にこの文法書をセランポールへ送った経緯について記録されている。

私の文法書はすでにジョージ・スタントン卿にチェックしてもらった。彼は私にこの本を印刷するように勧めた。東インド会社商館のエルフィンストーン館長はこれを(インド)のロード・ミント総督に送りそして会社の役員会に知らせると言ってくれた¹⁷。

エルフィンストーンさんはすでに私の文法書をベンガルに送った¹⁸。

つまり、モリソンの文法書はスタントン卿のお墨付きをもらって、東インド会社を介して印刷のためにインドに送られた。それにも関わらず、何らかの原因で、モリソンの文法書はマーシュマンより1年遅れて出版することになった。マーシュマンはモリソンの原稿を読んだかどうか定かではないが、両者の文法書を見てみると、いくつかの違いが分かる。

まずは両者の漢字に対する考え方の違いである。マーシュマンは「中国語は風変わりな言語であるが、容易に習得できる。他のアルファベット言語は全く原理が違うが、これを徹底的に調査することで、いままでこの言語を立派なものに見せかけてきた多くの誤解を取り除くことができる。この言語の全く違う本質を明らかにすることもできるかもしれない。構造上は不規則なものが少ないので、我々が持っている能力から言うと、サンスクリット語、ギリシア語、さらにラテン語より習得しにくいものではない」¹⁹と中国それ語が簡単に習得できると考えてい

¹⁷ Letter to LMS Nov.1811 'My Grammar has been examined by Sir. George Staunton, who advised me to print it. Mr Elphinstone the chief of the Factory has talked of sending it to Lord Minto & noting it to the Court of Directors.'

¹⁸ Letter to LMS Feb.27th 1812 'Mr Elphinstone has sent my grammar of the Chinese language to Bengal.'

¹⁹ Joshua Marshman *Elements of Chinese Grammar* 『中国言法』 Serampore 1814 'That the Chinese is a singular language, will be readily acknowledged. But although it differs widely in its principle from every alphabetic language, a though investigation of the subject, will probably remove many of the mistakes hitherto entertained respecting it, and perhaps evince, that though totally different in its nature, it is little less regular in

る。

また、漢字の部首を「elements」（要素）と呼び、「すべての漢字に曲線的な性格がないため、あまり装飾性が感じない。」²⁰とアルファベット言語の視点から漢字を分析している。それは結局マーシュマンの中国語への理解を間違った方向へ導いてしまった。

それに対して、モリソンは「学習者は中国語がとても簡単に習得できると考えながら勉強してはいけない。しかし習得不可能だと考えて学習を諦めてもいけない」²¹と学習者に慎重な学習態度を示唆している。この中国語観はモリソンの一貫した態度だと考えられる。書簡にも同様な考えを記録している。

マーシュマンと私は中国語習得の難易について意見が分かれている。しかしこれは重要なポイントではない。キリスト教の伝播にある程度の中国語を習得することは不可能ではないことを知るの大事である²²。

マーシュマンとの対立が明らかである。マーシュマンが習得した中国語は宣教活動に役に立つ程度の中国語であるが、決して中国語の神髄を理解した訳ではないとも言っているように読み取れる。

モリソンの漢字への認識は中国人の思考に近い。214 部首を紹介する際に、中国語では「部」と言うと紹介した上で、「keys or radicals」と訳した。つまり、マーシュマンと違って、部首はA、B、Cのようなエレメントではなく、漢字を構成する語根であると正しく理解できている。さらに、漢字の書体に「正字、行字、草字、隸字、篆字」があると説明し、その例文も掲載した。マーシュマンの文法書にはこのような説明がない。もし彼が漢字の書体を分かったら、「中国語は装飾性がない」との発言はしないだろう。

4. 漢字の発音表記（Orthography、正字法）について

its formation, and, (were tge means equally within our power,) scarcely less more difficult of acquisition, than Sungskrit, Greek, or even Latin.’ p.3

²⁰ Joshua Marshman *E, ements of Chinese Grammar* 『中国言法』 Serampore 1814 ‘It is, however, worthy of remark, that *circular* forms are excluded. Whatever of this nature appears in any character, is merely fancy and embellishment, and no way essential to the meaning of the character.’ p.6

²¹ Robert Morrison *A Grammar of the Chinese Language* 『通用漢言之法』 Serampore 1815, ‘The student therefore should not undertake Chinese under the idea that it is a very easy thing to acquire; nor should he be discouraged from attempting it under an impression that the difficulty of acquiring it is next to insurmountable.’ p.iv

²² Letter to LMS Dec.22.1812, ‘Mr. Marshman & I differ in opinion about the ease with which Chinese is acquired. The question is not important. It is sufficient to know that it is not impracticable to acquire it to a degree that is useful in propogating Christianity.’

文法書の漢字の発音表記について、両者の意見が一致しているところが多いようだ。今までの書物における漢字の発音表記はカトリック宣教師によるものである。その多くはフランス語、イタリア語、ポルトガル語に基づくものであった。このような発音表記はイギリス人の読者にとっては全くメリットがない。イギリスの読者には英語式の発音表記がもっとも相応しいとマーシュマンが主張している²³。

モリソンも『五車韻府』で同じ意見を述べている。「字書の発音表記はすでにヨーロッパで出版された書物或いは写本に基づくべきだという人もいるが、しかしもし統一された発音表記があれば、筆者は特に採用した。ポルトガル人、フランス人、ドイツ人はそれぞれ違う表記を使用していた。人名、地名、外国語の発音表記が統一されていないのはアルファベット言語における一弱点である。この弱点は歴史、地理或いは外国語に多くの不便をもたらした… (中略) …筆者はまったく斬新な発音表記を導入したい」²⁴。実際、『通用漢言之法』では独自の発音表記を導入している。

漢字の発音表記ではモリソンとマーシュマンの意見が一致しているとは言え、二人の表記法は統一されているものではない。これに関して、モリソンは「どんな発音表記を採用しても、中国語に近い発音を得るのは困難なことではない」と述べている²⁵。

ただ、ヨーロッパの国々ではアルファベットに対して一致した発音をもっていないので、英語に基づいて発音表記表を作った方がよいだらうと述べている²⁶。つまりイギリスの読者のためのイギリス式の表記が必要との主張である。

5. おわりに

19世紀の初頭に中国語学習と聖書翻訳において、モリソンとマーシュマンの間にかかなりの相違点があったことが本論の分析によって明らかになった。両者の間には確かに確執が存在している。それを次のようにまとめる。

1) 中国語の難易度について両者の主張は全く違っていた。

在住場所という環境的な要因も大きいですが、両者の中国語のオリジナル性に関する根本的な視点はかけ離れている。マーシュマンはアルファベット文字の発想から中国語を分析するのに対して、モリソンは中国語のオリジナル性を認め、ヨーロッパの言語と全く違った固有言語として中国語を扱っていた。

2) お互いに強いライバル意識の存在。

モリソンは中国にしながら、聖書翻訳と中国語文法書印刷は常にマーシュマンより一步遅れ

²³ Joshua Marshman Ibid. p.97

²⁴ Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language Part II* 『五車韻府』 Vol.1, Macao, China 1819, pp.viii-iv

²⁵ Robert Morrison *A Grammar of the Chinese Language* 『通用漢言之法』 Serampore 1815 pp.2-3

²⁶ Robert Morrison Ibid. p.3

ている。これに対して、モリソンの心情が穏やかではないところは彼の書簡から読み取ることができた。一方、マーシュマンも常にモリソンを意識しながら、中国語翻訳と中国語学習を進めていたのである。彼はモリソンに中国語学習の支援を頼らざるを得ないとしながらも、セランポールの翻訳と印刷情報を意図的にモリソンへ知らせるのを遅らせようとしていたようだ。それに対して、モリソンの態度は寛大であった。マーシュマンに中国語学習支援を惜しみなくしただけではなく、聖書翻訳語の共有も行ったと推測できる。

3) 政治的支援と印刷環境の違い

中国語学習環境はモリソンの方が恵まれていると言えるが、その反面、マーシュマンと比べると、政治と印刷環境が随分劣っている。マーシュマンは Lord Minto 総督の支援の元で、漢字活字を使って不自由ながらも印刷活動を行うことができたのに対して、モリソンは東インド会社の正式な印刷支援を受ける前に (1814 年以前)、身を潜めながらこつこつと木版印刷で懸命に活動をせざるを得なかった。モリソンの聖書翻訳と文法書が先にできていてもいつもマーシュマンより印刷が遅れたのはこの政治的環境と印刷環境にも一因があったのではないかと考えられる。

本論はモリソンとマーシュマンの中国学習と聖書翻訳における確執に焦点を置いて論じたのみである。これをきっかけに今後さらに両者の著作の中身について比較していきたい。

参考文献：

1. モリソン書簡 (ロンドン大学 SOAS 所蔵)
2. Joshua Marshman 『聖經』 Serampore 1822
3. Joshua Marshman *Elements of Chinese Grammar* 『中国言法』 Serampore 1814
4. Joshua Marshman *The work of Confucius* 『論語』 Serampore 1809
5. Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language Part II* 『五車韻府』 Vol.1 Macao, China 1819
6. Robert Morrison *A Grammar of the Chinese Language* 『通用漢言之法』 Serampore 1815
7. Robert Morrison 『耶蘇基利士督我主教者新遺詔書』 Canton 1813
8. 『四史攷編』 (大英図書館所蔵)
9. 塩山正純「域外における聖書の中国語訳-馬士曼『聖經』の語彙的特徴について」『文明 21』22号、愛知大学国際コミュニケーション学会 2009 年
10. 譚樹林『馬礼遜与中西文化交流』中国美術出版社
11. 朱鳳『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』 白帝社 2009 年

付記： 本論文は日本学術振興会科学研究費助成事業科学研究費補助金研究「題目：東西文化を架橋するロバート・モリソンの翻訳活動に関する書誌学的に研究」(基盤研究 C 平成 22 年度～24 年度、課題番号：22520653) の研究成果の一部である。翻字作業に協力してくださった元京都大学ドイツ語教師 Bernd Neumann さんに謝意を表す。